

わらわの長巻

田島「俺には夢も希望もない。金もないし、仕事もないし、彼女もない。ああ、俺はもう生きてる価値もない。俺はこれからどう生きていけばいいんだ。ねえ神様、俺はこれからどうしたらいいですか」

神様(田代)登場。

神様「そつだなー」

田島「わつーびつくりしたー誰?」

神様「わしは神じゃ」

田島「え?神?おまえ神様なの?」

神様「神に向かっっておまえって言うの?」

田島「あ、す、すみません。わー、神様ってほんとにいるんだ。ねえ神様、俺、これからどう生きていけばいいかわからなくて悩んでるんです。どうしたらいいですか?」

神様「ふむ。ならば迷える男よ。西に向かっつて進むのじゃ」

田島「西?西に向かえは?」とあるの?」

神様「たぶん」

田島「たぶん?」

神様「行けー男よ。お前の幸せはたぶん西にある」

田島「たぶんっていうのがひつかかるけど、神様が言うんだからまっとうそうなんだから。わかったよ神様。俺、西に向かっつ。西つてどつち?」

神様「あつちじゃ」

田島「わかった、あつちだね」

神様「行けー行くのじゃー」

田島「いつてきますか?」

神様「待てー」

田島「え?」

神様「待つのでじゃー」

田島「今行けつて」

神様「言い忘れたことがあります」

田島「何?」

神様「**「」**を出て、お前が最初に手にしたものを、大切に持っていなさい。わかったか?」

田島「あ、は、はい」

神様「わかったなら行けー行けーつー」

田島「あ、は、はい」

ティッシュ配りの兄さん(山上)登場。

田島はいつの間にかティッシュを持っている。

田島「えっ？」

ティッシュ配りの兄さん退場。

田島「あっ、いつの間にかティッシュもどっちやった。あーそっいえば神様が確か、最初に手にしたものを、大切に持っていなさいって言ってたよな。えーっ、ティッシュがそうなの？んー、まあいつか。じゃあ西に向かって進もう」

田島は下手に向かって足踏み。

ママ(田代)と子供(山上)が下手から登場。

子供がおっさんのようなクシヤミをする。

子供「マーマー」

ママ「あらあら、りゅうちゃん鼻水が出ちゃったわね。まあ困ったわ。ママったらティッシュを持ってない。

あー、困った困った」

田島「え…あ…(ティッシュを見る)」

子供「ママー、鼻水ふいてー」

ママ「ふいてあげたいんだけど、ティッシュがないのよ。どうしましょう」

子供「スス」

ママ「困った困った」

田島「あ…の…よかったらこれ(ティッシュ)を差し出す」

ママ「まあ。いいんですかっ」

田島「お困りのほうなとで、どうぞ使ってください」

ママ「ありがとうございます」

ママは豪快にティッシュを全部出し、子供の鼻水をガツサリとふき取る。

田島「あ…全部使っちゃったんだ」

子供「あースッキリした。おじさんありがとう」

田島「スススス」

ママ「本当に助かりました。お礼と言ってはなんですが、これもらってください(缶シユースを取り出す)」

田島「え？(受け取る)」「
ママ」それでは失礼します」

田島「あ、ちよつと」

子供「おじさん、バイバイ」

田島「あ、バイバイ…」

ママと子供、上手に退場。

田島「これエナジードリンクじゃん。あのお母さん、なんで「こんなもん持つてるんだろ」って「ティン」が
エナジードリンクになっちゃった。まあいつか。よし、俺は西に向かって進むぞ」

田島が歩いていると、下手から具合の悪そうな山上が登場。

すれ違いざまに倒れる山上。

田島「わつ！えつ！ちよ、ちよつと大丈夫ですか？」

山上「み…水…」

田島「え？」

山上「…水が飲みたい…」

田島「水？水は持ってないけど、エナジードリンクならあるよ。飲む？」

山上「飲む」

田島「じゃあ、ふた開けてあげるね。はい、どうぞ」

山上は飲むととんとん元気になっていく。

田島「え？…え？…え？…」

山上は服をちびつてムキムキマンになる。

山上「公アーツー！」

田島「エナジードリンクすげー！」

山上「ありがとう。さっきまで喉が渴いて死にそうだったんだけど、君のおかげで生き返ったよ」

田島「死にそうだったの？」

山上「君は命の恩人だ」

田島「あ、いえいえ、とんでもない」

山上「お礼に「これをもらってくれ(小さく畳まれた服を渡す)」

田島「え？(受け取る)」

山上「では失礼」

田島「あ、どうも・・・」

山上は上手に退場。

田島「これ何だろう？（服を広げる）ん？・・・あ、これ・・・サンタの服？あの人、なんでサンタの服なんて持ってるの？・・・ん？待てよ？・・・ティッシュがエナジードリンクになって、エナジードリンクがサンタの服になった。ハッ！これつてもしかして、わらしべ長者みたいな展開じゃね？って」とは、このサンタの服が次また何かに化けて、最後は俺は大金持ちになるんだ！アハハ、絶対そうだよーし、では西に向かつて出発だ！」

田島が歩いていくと、下手から肌着の老人（田代）が、犬（山上）と手をつないで現れる。

田島「あつー来た来た！次はあのおじいちゃんだな。きつとサンタの服を探しているに違いない」

老人は何事もなく上手にはけようとする。

田島「あれ？・・・あ、あの・・・ちよつと、そこのおじいちゃんー」

老人「・・・あー？（耳が遠い）」

田島「何かお困りではありませんか？」

老人「わしは美空ひばりではありません。ひばりはもう死にました」

田島「あ、いやいや、困ってる」とはありませんか？」

老人「ああ、ちよつと前まではゲートボールでしたが、一緒にやっていた友人が死んでからは、もうめつきりやつていません。最近はおひばり「けし集めにハムつています」

田島「ハムつてる」とを聞いてるんじゃないかと、困ってることを聞いてるんです」

老人「困ってる」とい

田島「は？」

老人「困ってることは、耳が遠いことですね。それから腰が痛くて、ヒザも痛くて、あ、あと物忘れもひどくなりました」

田島「あー、えーと・・・あの、おじいちゃん、服がほしいんじゃないですか？」

老人「あー、わしは靴なんてそんなハイカラなものは履きません。サンダルでいいです」

田島「靴じゃなくて服。だつてほら、おじいちゃん、肌着だし」

老人「肌着？あー、服を着てくるのを忘れていました。どつりで寒いと思った」

田島「でしょ。だからほら、ちよつと「肌着」に服があるから、これよかつたら着てや」

老人「おー、心優しき若者よ。ありがとついでいります。ではさつそく着てみます」

老人は服を着る。

老人「おー、これはこれは、なんだかサントラになった気分じゃ」

田島「おじいちゃん、すげー似合うよ」

老人「ありがとっございます。何かお礼をしなければ」

田島「いやいや、いいんですよ。そんな気を使ってくれなくて」

老人「そうですか。では(去ろうとする)」

田島「あ、いやいやいやいや、えーとえーと、ごめんなさい。正直に言います。俺、お礼がほしいです」

老人「あー、あなたオレオレ詐欺だったんですか」

田島「違う違う違うー俺、あ、僕はお礼がほしいです」

老人「あー、お礼がほしいんですか。そうですか。今、わたしにはあげるものがこれといって持っていないの

ですが、おおそうじや、この犬をさしあげまじょう」

田島「え・」

犬「ワンっ」

老人「ピクルス。今日からこの人がお前のご主人様だ」

犬「ワンっ」

田島「ええっ」

老人「どうぞピクルスを可愛がってあげてください」

犬「ワンワンワンワン！(嫌だ嫌だ)」

老人「ピクルス。もうわたしはお前の飼い主ではない」

犬「嫌だ！僕のご主人様はあなただけです」

田島「あ、いや、俺犬は全然ほしくないなあ」

老人「わたしには、あなたに何もあげるものがないのです！だから、心を鬼にして、ピクルスを差し上げます。どうか、どうか、わたしの代わりに「いつを、ウウツ」泣く」

犬「(老人にすがりついて泣く)」

田島「いや、ちよつと、困ったなあ。ほんといらない」

老人「ええい、往生際の悪い！(犬を突き飛ばす)」

犬「キャオン」

田島「ああつ、ちよつと、乱暴な。もう俺、お礼はいらないっす」

老人「オレオレ詐欺は黙っておけい」

田島「俺は詐欺師じゃない」

老人「男たるもの、一度決めたことは覆してはならんーピクルス！わたしはもうお前の主人でもなんでもないーさらばじゃピクルス！(退場)」

犬「ワオーン！(号泣)」

泣いている犬をしばらく見つめる田島。

田島「…ピクルス?」

犬はピクツとするが、顔を背ける。

田島「ごめんね、なんか。俺がおじいちゃんにサンタの服をあげたばかりに…」
出会えたことも、もしかしたら神様の決めた運命なのかもしれない。俺と一緒に西に行ってくれないかな…俺の名前は田島。よろしくピクルス(手を差し出す)

犬はしばらく固まる。

そしてスツと手をつなぐ犬。

田島「ピクルス。今日から君は、俺の友達だよ」

犬「ワン! (笑顔)」

田島「西に向かってレッツ!」

犬「ワンワン!」

歩く田島と犬。

下手から大富豪田代が出てくる。

田島「来たー! ついに来た! あれは絶対大富豪に違いない!」

犬「は?」

田島「ピクルス、心の準備はいいか?」

犬「何が?」

田代「あー、困った困った」

田島「あの、どうかされましたか?」

田代「いや、私はこれから海外に行かねばならなくなった。たぶん二・三年は戻ることはないだろう。
一人で行くのは寂しいから、せめてペットでもいたらなあ」

田島「ああ、だったらちよつと」
犬「犬がいますんで、差し上げます」

犬「ちよつと何言ってるの田島!」

田島「名前はピクルスって言います。どうぞ可愛がってやってください」

犬「お前勝手なこと言ってるじゃねえ!」

田島「犬も喜んでいます」

犬「喜んでね!」

田代「それは嬉しい。ではお礼と云っては何ですが、私が海外に行っている間、代わりに私の家に住んでくれませんか? そしてもし私が帰らなかったら、家はあなたのものにしてください」

田島「はいー喜んでー」

犬「(待て待てー！俺はお前と離れるのは嫌だー)」

田島「さあ、ピクルス。今日からの方がお前の「主人様だよ」

犬「(違っ！俺のご主人様はお前だー)」

犬は田島に抱きつく。

田代「おやっ、ピクルスはあなたと離れたくなさそうですね」

田島「いやいや、そんなはずはありません。だって俺達まだ出会って一分くらいしか経ってないですから。な、ピクルス」

犬「俺は田島が好きだー」

田代「こんなに「主人様のこと」を愛しているのに、ピクルスを悲しませるようなことはできません。この話はなかったことになってください。それでは」

田島「あ、待ってー俺、大なんじゃないんですよー」

犬「ワンワン(抱きついてる)」

田島「離せよー」

田代退場。

田島「あ、待ってー行かないでー！……いつまで抱きついてんだよー(犬を突き放す)」

犬「キャオンー」

田島「せっかくのチャンスを台無しにしゃがんでこの野郎！あーっ！お前さえあいつの犬になれば、俺は大富豪になれたのにー。幸せになれたのにー(泣く)」

泣き崩れる田島の前にしゃがんで、しばらく見つめる犬。

犬「…泣かないで田島」

田島「えっ？…ええっ？…ピ、ピクルス、お前喋れるの？！」

犬「俺はこれからずっと、田島のそばにいる。辛い時も、悲しい時も、俺は君を一人になんかしらない」

田島「ピクルス…」

犬「俺が君を幸せにする」

田島「ピクルスー！」

田島が犬を抱きしめる。

暗転。

おわり